「南米産業開発青年隊の魂ここに凝固して学舎の礎を永遠に築く」

建設大学校中央訓練所長　長澤　亮太

産業開発青年隊は、昭和二五年戦後復興における二三男対策のため、地域青年団が主体となって産業開発青年隊運動を実施することから始まったものである。

昭和二八年四月、建設省における「国土総合開発促進のための産業開発青年隊導入要綱」が決定された。その導入において尽力されたのが、長澤亮太氏である。

昭和三〇年六月、産業開発青年隊における南米移住事業の必要性により、主にブラジル移住要員の要請訓練が開始された。そして昭和三十一年南米産業開発青年隊として、第一次隊十七名の隊員が、オランダ船ルイス号で神戸を出港した。そして十期生三十三名が集団渡航の最後の渡伯となった。その後十一期生以降は空路による移住となり、二十一名が渡伯している。南米産業開発青年隊の総数は三百二十六名となる。

そして、一年制であった産業開発青年隊の教育訓練を、2～4年制にするべく、建設省建設大学校中央訓練所を富士宮市根原に設置することとなった。それは、日本の象徴である富士山の麓の地から、海外進出させる青年に対して、心技体の教育訓練を行うためであった。

この設置においては、当時の富士宮市長　山川　斌市長、そして、地元開拓者のリーダーであった静岡県議会議員の植松　義忠議員の大きな理解により実現した。

それと同時期、山川市長より建設省に、富士宮東高校の移転のための敷地造成工事の要請があった。

そして、南米産業開発青年隊九期生三十一名が乗船前夜までの突貫工事で、造成工事に取り組んだ。予想外に大きな岩石の続出と、汲めども尽きぬ湧水と、雨また雨の連続に悩まされながら、昼も夜もなく工事を進めた。

移住隊員が出港した後は、昭和三十八年度の新入隊員が継続し、昭和三十八年十月に完成した。

産業開発青年隊は、平成八年三月に事業廃止になったが、昭和二十八年より事業廃止までの修了生は、海外研修生を含め約二万名であり、そのうち中央訓練所修了生は、約4千名である。多くの修了生は、国内はもとより、世界各地で活躍をしているのである。

そして、長澤亮太氏が愛してやまない詩を最後に記す。

富士の如く　美しく雄大に　尊厳なれ

令和五年十一月二十五日

産業開発青年隊創設七十周年記念大会　記念

寄贈者　産業開発青年隊同窓会一同